



スープ原料などに使われる加工・業務用タマネギの需要は近年、増加傾向にあります。県で

	単位 収量 kg/a	2L・L 割合 %	乾物率 %	B r i x %	窒素 利用率 %
かん水区	1,028	84.9	10.7	9.5	60.5
慣行区	818	83.1	10.5	9.4	41.0
有意差	***	n. s.			

*) : t 検定による *** : 0.1%水準で有意差あり、n. s. : 有意差なし

※黄色土で「もみじ3号」を試験した結果

加工・業務用タマネギ

生育後期のかん水で 収量や大玉割合が増

も加工・業務用野菜の生産振興を進めており、安定生産技術の確立が必要となっています。加工・業務用の実需者ニーズは糖度や乾物率が高いこと、大きさが2L・L級中心であることで

を行いました。かん水開始の目安として、PF（水が土壌に引き付けられている強さの程度。高いほど植物は吸水が難しくなる）を生育後期（3月下旬以降）に測定し、2・3以上になった日にかん水を行いました。その結果、どの土壌においても、生育後期の乾燥時にかん水することにより、かん水を行わない場合と比較して、収量と2L・L級割合、窒素利用率が向上しました。なお、土壌の種類によってかん水の効果が異なる傾向が見られました。また、今回の試験結果では、加工・業務用で問題となるタマネギの貯蔵性に、かん水の影響は認められませんでした。

実際の生産現場でかん水を行う場合は、生育後期の降水状況と土壌の水分状態を把握しておく必要があります。また、べと病の発生が懸念されるため、かん水の仕方には注意が必要です。

す。それに対応するため、生育後期の玉肥大期における土壌乾燥時のかん水が、収量に及ぼす効果について検討しました。県内の主要3種類の土壌で、品種「もみじ3号」の栽培試験

（農林技術開発センター 陣野信博）